特集 日本のネオナショナリズムを糺す

逆さまの世界地図から見るナショナリズム

伊豫谷　登士翁
一橋大学大学院社会学研究科教授

「逆さまの世界地図」から見えること

三次元の球形である地球を二次元の平面に投影した世界地図には、不可避的に、さまざまな製作者の作為が加わることになる。陸地や国家の形状に重きを置くのか、方位を重視するのか、面積を正確に示すのか、世界地図の作成には、多様な目的に応じて、これまでも多くの工夫が凝らされてきた。しかし、一見したところ客観的な合理性に基づく科学的行為と見なされる地図は、実際には、国民国家を基盤として形成されてきた近代世界像をさまざまな形で反映してきた。境界の形成、われわれと他者への分割を表す世界地図は、近代における国家中心的世界観と虚構としての「西洋」中心的歴史認識の双方をもっとも端的に示している。各々の時代に慣れ親しんだ地図から、その国の人々が自国から見た世界をどのように把握していたのか知ることができる。

いよたに　としお
1947年生。79年京都大学経済学研究科博士課程単位修得退学。同年より東京外国語大学講師、助教授、教授をへて、96年一橋大学大学院社会学研究科教授。著書に『グローバリゼーションと移民』『変貌する世界都市』『経済のグローバリゼーションとジェンダー』（編著）、『グローバリゼーションの時代（S．サッセン）』（翻訳）など。

「逆さまの世界地図 Upside Down World Map」と名付けられたオーストラリアで販売されている世界地図がある。南半球が上になっており、地図の中央にはオーストラリアがある。世界地図は、各々の国を中心として描く、したがって、オーストラリアでは、上下が逆になった地図が一般的であり、これがオーストラリア人の世界観である、と聞かされたことがあった。しかし、逆さまの世界地図は、オーストラリアで日常的に見かけるものではなく、土産物店でしか手に入らない。それを買い求めるのは、北から来た観光客、あるいは北に旅行する際の土産であるという。オーストラリアでは逆さまの世界地図が利用されてきたという思い込みが示していることは、ナショナリズムがそうであるように、自分に似せて他人の世界像まで描こうとする、ということである。

われわれは、北半球を上にして、経度と緯度を升目に配して書かれた世界地図であるメルカトール図法に馴染んできた。逆さまの世界地図は、南半球が大きく描かれてはいるが、基本的には、学校の授業などで通常使われてきた見慣れた地図を180度回転させただけである。しかし、この地図を眺めていると、これまでの世界像が揺らぐような、言い知れぬ違和感を抱く。違和感は、大陸や国の形が上下逆になっていることから来るのであろうし、また馴染みのある位置関係が逆転していることにもよるであろう。暗黙のうちに刷り込まれた世界地図の境界が、上下の逆転によって、崩れるのである。人々を分かつ境界が政治的に創られてきたものであり、国境さらにはアジアやヨーロッパ

といった広域の境界すら、想像の産物であることを改めて意識させるのかもしれない。

違和感は、われわれがいかにナショナルな領域に囚われてきたのかを表していたのである。もともと地球の表面の7割は海なのであるが、南半球を上にすることによって、その点はきわめて鮮明に表れてくる。地球上の陸地は、驚く程小さく、ほとんど海で覆われている。大陸は海によって分け隔てられ、欧米が地図の両端の隅に追いやられる。大陸が国家によって分割された世界地図に慣れ親しんだわれわれは、太平洋が中央に位置し、大海によって分断された限られた陸地を国家が分割する地図に爽快ささえ覚えるのである。

国民国家の世界地図

しかしながらより重要なのは、地図の上下や左右の配置がたんなる位置関係ではないという点である。北が上にあり、南が下にある地図というものは、たんに便宜的な配置に過ぎないのではない。上下は、近代世界秩序の序列・関係なのであり、逆転による違和感は、何よりもそのことを示している。虚構の産物としての「西洋」の権威が急速に失われるなかで、ユーロセントリックな世界観に対する反発は、このような上下の逆転した世界地図を心証に描こうとする。しかし無自覚に近代世界秩序に囚われたわれわれは、実際に逆さまの世界地図を見せられたときに、違和感を感じてしまうのである。ユーロセントリックな思想や規範に反撥しつつも、自らの世界観の基軸が揺るがされるからであろう。

20世紀は国民国家の時代であり、世界地図は端的な表現であった。地図は、国境によって分割され、色分けされて表示される。かつては植民地を同じ色に塗りつぶすことによって、世界支配の範囲を明示してきた。いまや、世界地図は、ごく一部の地域を除いて、ほぼ完璧に明確な境界によって国民国家に分割され尽くした。数十の国家からスタートした20世紀は、ソ連邦と社会主義圏の解体によって200にものぼる国家に増加し、新しい世紀を迎えることになった。

近代は、空間の支配を巡って権力が抗争し、技術が発展した時代でもある。そして空間の支配は、交通手段を巡る競争であり、時間の闘争であった。大航海時代には、いかに速い船舶を創り出すのか、航海術を巡って争われた。その際に考え出されたのが、船舶の舵の方向を正確に割り出す地図であった。ヨーロッパの貿易商人のニーズにあった地図として作られたのが、メルカトール図法である。

しかしながら、メルカトール図法では、高緯度の国は、相対的により大きく表され、結果的には、比較的高緯度にある西ヨーロッパ諸国が大きく示されることになる。イギリスは、植民地地域よりも、相対的に大きな面積であるかのごとく表示されてきたことになる。さらに、地図には、客観的どころか、支配関係が挿入されてきた。北半球を上にして書かれた世界地図は、欧米の帝国主義国を頂点としたヒエラルキーを地図のなかに明示してきた。世界秩序の上下関係が、地図のなかに図示されてきたのである。子午線の中心は、イギリスのグリニッジであり、世界の中心にある地域と周辺にある地域が、ひとつの平面上の中央と端におかれる。近東や極東という言い方は、周知のように、ヨーロッパ中心的な世界観である。地図は、重要な国とそうでない国を腑分けし、世界時間を誰が支配しているのかを表示してきた。しかしいま、国民国家の領域性が揺らぐなかで、世界地図が大きく塗り替えられようとしている。逆さまの世界地図によって引き起こされる違和感は、何よりも、その中に世界秩序の逆転あるいは揺らぎを見て取ることができるからではないか。

グローバル資本の世界地図

グローバリゼーションは、国民国家を解体するのではない。グローバル化の進展がナショナルな機構や制度そのものを消失させるわけではないのである。グ

ローバリゼーションが、経済だけでなく政治や文化の均質化を引き起こすといっても、国民国家を含めたローカルな多様性や境界の存在は、グローバル資本が富を生み出す源泉である。いわゆる民族やエスニック集団の対立も、グローバル資本の活動する場に危害が及ばない限り、秩序形成と資本蓄積にとっては不可欠である。

制度や機構の差違は、租税負担や環境規制などを免れる手段と化している。通貨市場が為替相場によって結びつけられていることは、資本にとってリスクを分散する上で重要であろう。人の移動を国境で管理することによって、国家間の賃金格差は固定され、世界的な規模での低賃金労働力の供給は確保される。移民政策は、外国人を一方的に排除するのではなく、移動できる人とそうでない人を、良い外国人と悪い外国人を分ければよいのである。多民族・多文化の共生は、選択された移民を新しい時代に応じた同化あるいは懐柔セレモニーと化している。シチズンシップ・国籍は、豊かな国に住む人々の特権を維持する世界的な制度のひとつなのである。

ナショナリズムの興隆は、自らの豊かさを他者から守り、世界秩序の中で獲得してきた特権を維持するためのメカニズムである。グローバル資本は、一方では国家のさまざまな支配装置に穴を空け、領域性を崩してきたが、他方では、富の偏りを含めた国家間の格差を維持しつつ、国家という支配装置をグローバルな資本が活動し得るように変型してきた。企業活動の越境化や膨大な資金の移動によって、国家の経済的権能は脅かされ、近代国家の根幹である主権や市民権は再編を余儀なくされてきたが、他方では、通貨当局は為替相場と物価安定の番人であり、規制緩和や民営化は、新しい官僚体制と新しいエリート層を創り出すことになった。現代は、グローバリゼーションとナショナリズムとの共犯関係が明確になった時代である。

かつて帝国主義と呼ばれた時代の最大の課題のひとつは資源の確保であった。しかし石油危機と資源ナショナリズムを経て、いまや領土支配による資源の確保は時代遅れとなってきている。精製・加工・販売を支配すれば、必要な資源は、市場を通じて得ることができる。領土支配を維持するには膨大な負担を伴うことになり、経済的には、排他的な領土性を堅持する必要性は著しく低落した。領土的な支配によるリスクは、むしろ個々の国家へと移転され、資本はますます柔軟に効率的に、移動しうる条件が与えられてきたのである。

市場経済にとって重要なのは、グローバリゼーションが具体的に展開される場である。そうした場は、世界都市であり、輸出加工区であり、グローバル・ファクトリーである。これらを連結するネットワークは、技術革新によって飛躍的に発展してきた。商品市場から資本市場、さらに労働市場までもがグローバル化してくる過程で、グローバル資本にとって、国境によって境界を厳密に明示する必要はない。生産拠点はフートルーズになっただけでなく、下請け生産によって外部化してきた。もはや生産活動すら付随的となり、経済活動の中枢は、研究開発とマーケティングそれに金融を含めた管理支配である。

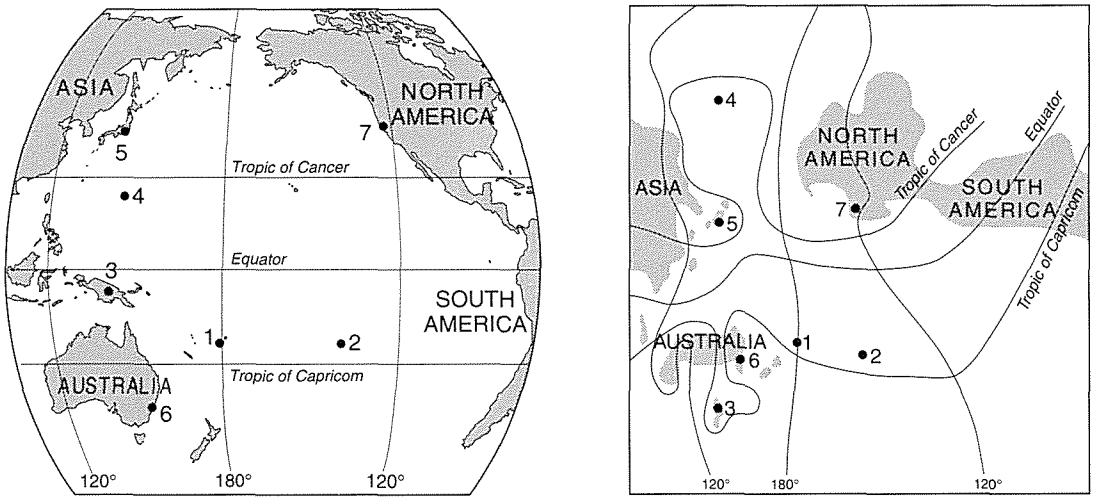
情報通信技術の発達とコンピュータとの連結は、文字通り世界を単一の市場に作り替えた。世界的視野を持つグローバル資本にとって世界地図はどのように描かれるのであろうか。それを次の二つの地図を例として確認しておきたい。

いま経済規模にしたがって国の大きさを表示した地図を描くならば（図1）、アメリカ、EU諸国、日本が大きく表示されることになり、ついで新興工業国、それに人口の多い中国・インド・ブラジルなどが続き、発展途上国の多くはほとんど点としてしか表われない。この場合、国の規模として表されているのは、市場としての大きさである。改めて言うまでもなく、経済活動にとって重要なのは、たんなる人口規模でも、面積でもなく、この市場規模にある。

もし、同じ国であっても、経済活動の活発な地域と奥地の農村部との経済格差を反映させるならば、経済規模を表す地図はいっそう歪な形になるであろう。発展途上国においては、いまや国家間の格差よりも、国内における所得格差の方が著しく拡大している。国内の地域的な所得格差は著しく、その点を反映させ

図1　経済規模を表示した世界地図

図2　環太平洋地域の空間・時間地図



1 Fiji　2 French Polynesia　3 Papua New Guinea　4 Trust Territories of the Pacific　5 Tokyo　6 Sydney　7 San Francisco

（注）図1・図2は、ともに、David Held ed., *A Globalizing World ? Culture, Economics , Politics* , Routledge (The Open University) ,2000,の「第1章」(Allan Cochrane and Karthy Pain) からとったものである。

れば、例えば沿岸地域が大きく示されながら、背後の農村部は、極端に小さくなる。地域間の所得格差は、欧米諸国においても拡大している。グローバリゼーションの創り出した世界地図では、国家という面を持った拡がりではなく、点としての富の集積点が重視され、所得格差の拡大が創り出した分断線が国境をまたいで世界中に張り巡らされることになる。

グローバリゼーションは、空間の再編であるといわれる。より厳密に言えば、輸送通信技術の発達が時間を短縮し、そのことが空間を縮小させてきた。世界都

市と呼ばれる各国の主要都市は、ジャンボジェットが就航する航空路線で結びついている。いまや成田とJFKは空白の時間によって結ばれ、空港を降りれば、そこは、同じ空間によって連接されている。東京とニューヨークは同一空間のなかにある。世界都市と呼ばれる地域は、相互にはるかに緊密に結びついている。貿易や投資などの経済的な統合化も、これまでのような国家間の結びつきではなく、都市間ネットワークと捉えなければならない。しかしそのネットワークは、各都市が対等に結びついた水平的なものではなく、ヒエラルヒー的な階層構造として形成される。人の移動の流れも、ますますこうした世界都市間の結びつきを反映したものとなっている。

運輸や通信のアクセスを考慮した距離を、地図のなかに組み込めば、もはや世界地図は、原形をとどめないほどに変型する。主要都市の間は、航空機で結ばれ、膨大な情報のやり取りで結ばれ、さらにいまでは越境する家族によって結ばれている。これまでコミュニティあるいは共同体的と表現されてきたさまざまな集団が、国境を越えて展開しているのである。

情報や輸送による空間・時間的近接を世界地図として描くならば(図2)、主要都市間は地図の中央に近接して配置され、世界都市のランクが下がれば、しだいに地図の周辺へと押しやられる。さらに世界都市から排除された地域は、地図の辺境の片隅へと追いやられるのである。地図は、グローバル資本にとって重要な地域とそうでない地域を、一目で分かるように示すであろう。図2は、そうした地図の一例として、航空機を利用した場合の最短の時間を距離として、世界地図を組み直したものである。

グローバル資本は、空間と時間が組み替えられた世界地図にしたがって世界戦略を立てる。生産戦略とマーケティング戦略とを組み合わせながら、本社機能、研究開発、生産工場、販売拠点などが、世界的なネットワークで結ばれる。多国籍企業と呼ばれる巨大企業は、世界のほんの一握りであるが、世界の生産資源の4分の1以上を、そして世界貿易の大半を支配している。巨大企業の有する経済的な支配力は、一国のGDPに相当する規模であり、いまや世界経済は南北に分断されているのではなく、豊かな企業群とそこから排除された人々へと分化してきている。

しかしこうしたグローバル資本の世界地図を描いてみたときに、そこにあるのは合理性と効率性に彩られた資本の世界である。あたかもナショナリズムは不合理なものとして消去されてくるような錯覚に陥るであろう。グローバリゼーションの時代において、ナショナリズムは、不合理で消え去るものであろうか、それとも近代そのものは、もともと不合理であり、グローバリゼーションとはそうした不合理性を排除しようとする動きなのか。現代のナショナリズムの多くは、国境や境界を消去されたことへの抵抗として表れてきている。国境は近代が創りだしたものであり、それゆえに、境界を創り出すことに加担する反グローバリゼーションの位置は、いかなる立場に立つとしても、ナショナリズムへと収斂されるのである。

21世紀の世界地図

グローバル化が投影された世界地図は、痕跡をとどめぬ程に境界を歪めてしまった。しかしその中で境界それ自体が消失したわけではない。むしろ強固に境界を構築しようとする動きが興隆してくる。ナショナリズムが、世界のいたる国において、さまざまな形で徘徊しているのである。20世紀はナショナリズムの世紀であり、国民国家によって地球上のほぼすべての地域が分割され尽くした時代であった。ソ連邦の崩壊と社会主義体制の解体は、その最終局面であり、ユーゴの例を挙げるまでもなく、ナショナル・アイデンティティに基づく国家形成へと限りなく領土が細分化されてきた。

しかしいまや、ナショナリズムは、決して領土的な領有を巡る争いだけではない。グローバル化した時代が国境を越えた排除と統合化によって特徴付けられるとするならば、ナショナルな言説そのものがグローバルに展開する時代になったことを意味するで

あろう。ナショナルあるいはエスニックな紛争から免れてきた、あるいは解決してきたと考えてきた先進諸国においても、ネオ・リベラリズムの台頭によって、公共空間を巡るせめぎ合いは、ナショナルあるいはエスニックな対立を介して先鋭な形で噴出してきている。このことは、ナショナリズムの対抗が、これまでのように他者あるいは外部にのみあるのではなく、われわれあるいは内部における新たな分断として表れてきていることを意味するであろう。

かつて体制に批判的であった人々が、ナショナルな空間の再構築を唱え、他方では市場経済の浸透を支持する保守派の人たちは、民営化や規制緩和を主張してグローバリズムを支持している。グローバリゼーションの言説を唱えるのは、グローバリズトだけでなく、ナショナリストである場合も多い。同じく、反グローバリゼーションの言説は、ナショナリストだけの特権ではなくなった。グローバリゼーションの動きは、ナショナリズムの配置を転換させてきているのである。

ここ数年の間に、日本において顕著となってきたナショナリズムの台頭は、決して日本の特殊な状況にあるのではない。領土の拡張と民族の自決を標榜し、国家建設を目指して戦わされた古いナショナリズムは、グローバリゼーションの時代における新しいナショナリズムを先導しながら、21世紀を迎えたのである。新しいナショナリズムは、21世紀の世界地図をどのように描くのであろうか、あるいは、もはや世界地図はなくなるのではないのか。

ポール・ギルロイは、最近の著『人種への抵抗(Against Race)』のなかで、「ネオ・レイシズムの時代は終わった」と宣言した。皮膚の色に典型的に見られるような外観上の差異に基づいた人種差別に代わって、第二次世界大戦後は、言語や習慣といったいわゆる文化に基づく差異による人種差別が問題とされてきた。生物学や人体計測学、遺伝学などの科学的装いをもって人種的優越性を国家統合の政策として掲げた戦時期の人種差別は、典型的にはホローコーストなどのジェノサイドを引き起こした。ある意味では人種差別の言説を巡る戦争であった第二次世界大戦は、人種差別を国家的正統性から引きずり降ろし、平等と人権という新たな体制を基本とする国家間関係の構築を目指すことになった。戦後の国家は、もはや人種差別を政策に組み込むことは、主権国家としての正統性を問われることになる。

しかし、カラーラインによる人種差別の時代であった20世紀は、国家主権の自立と人権、民主主義を掲げながらも、人種によるヒエラルヒーが解体することはなかった。アメリカにおいて公民権運動が成果を獲得したのは1960年代であり、オーストラリアにおいて白豪主義が廃棄されたのも同じく、60年代であった。第二次世界大戦の過程で盛り上がった反人種差別の運動が世界的規模で浸透してきたのは、今からたかだか半世紀前に過ぎない。しかし、こうした過程で成立したさまざまな法的制度的な動きは、人種差別を撤廃させることに成功したのではなかった。むしろ、60年代以降のグローバリゼーションの過程で、アメリカにおいて白人と黒人との隔離現象(セグリゲーション)は進んでいる。黒人の中で中産階級化してきた層が現れるとともに、生涯職に就けない層がカラーラインに沿って増大し、黒人内部での格差は、耐え難い水準にまで拡大してきた。所得階層の分極化が、確実に、カラーラインに沿って進行してきたのである。

グローバル化のなかでのレイシズムが世界的に大きなテーマとして掲げられるようになってきた。「ネオ・レイシズムは終わった」という言葉は、遺伝子組み替え技術や臓器移植の発達などの状況のなかで、レイシズムが新しい局面を迎えてきているということを意味するだけではない。遺伝子工学の発達は、むしろ、人種を肌の色から遺伝子の配列へと移し換えながらも、新しく科学的装いを持った人種差別へと置き換わってきている。カラー・ラインによるレイシズムの終焉を宣言したネオ・レイシズムの論者への皮肉を込めた言葉とも理解できるのである。

旧ナショナリズムが新しい形のナショナリズムへと転換してきており、それを許容する土壌が醸成されつつある。こうした多層化した人種差別を織り込んだ世界地図は、どのように描けるのであろうか。